

Forclosure addescents (2) : comparison between educational faculty and others

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Okada, Tsutomu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00001090

自我同一性早期完了地位についての一考察(2)
 = 学部間比較を中心として =

Foreclosure adolescents (2): comparison between
 educational faculty and others.

岡田 努
 Tsutomu Okada

問 題

1. 青年期危機説と平穩説

青年期は葛藤や病理など危機的状況にあると言われ、「青年期危機」と呼ばれている。この「危機」概念は、「人生上の分岐点」（以下「分岐としての危機」と表記）の意味と「病理的な症状・混乱を示す」（以下「病理としての危機」と表記）の意味が混乱して用いられることが多い。

清水・藤頼（1976）は分岐としての危機の立場から、危機概念を「人生の次の段階に向かったの開化と凋落の分岐点ないしはその時点における決断」とし、青年期は身体的・社会的な変化の過渡期であり、それらの変化に対する自我のあり方に、危機的青年は決断を迫られているとしている。

一方、青年期は概して平穩であり青年期危機というものは多くの青年にとっては見られないとする「青年期平穩説」がある（村瀬，1984など）。村瀬・村瀬（1973）は青年期の前半（12才から16才）の青年に対して各種の心理検査、面接などを縦断的に施行し、その結果、平均的青年においては、とりたてて顕著な病理的症状や混乱が頻繁に出現することはないことを見出し、青年期平穩説の根拠としている。このように青年期平穩説は「病理としての危機」概念について批判的に検討したものと言うことができるが、「分岐としての危機」概念までも否定しうる根拠は十分示されていない。

2. 青年期危機と自我同一性地位

青年期後期（ほぼ大学生時期に相当）の発達課題として Erikson（1959）は自我同一性（ego-identity）の確立を挙げている。すなわち、個人が自分自身の心理-社会的位置付けを自分自身で納得できる形で受け入れる自己定義を形成するために必要な期間として、青年期後期が考えられている。Marcia（1966）は自分自身の進路について思い悩み選択に苦慮する「危機（crisis）」と、危機を経て決定された自分のあり方・進路について積極的に関与する「傾倒（commitment）」の2つの変数から自我同一性地位（ego identity status）という4つの地位（類型）を想定した。

すなわち

- ①危機を経験し、その結果十分な傾倒を持つ「達成地位（achievement）」
- ②明白な危機を経ずにそれまでの周囲の大人（主に両親）の価値観をそのまま継承しこれに傾倒する「早期完了地位（foreclosure 早産あるいは権威受容）」
- ③危機の最中で自己決定の模索をしながら、傾倒する対象が見つからない状態の「モラトリアム地位（moratorium）」
- ④危機も傾倒もなく、いわば心理的に立ち往生してしまった状態の「同一性拡散地位（diffusion）」である。

このうち早期完了青年の特徴として両親の価値観を無批判に継承し、防衛的で固い性格特徴が指摘されている（Marcia, 1966など）。北村（1983）は、このような青年（固いF）の他に、社会一般の価値観を抵抗なく取り入れ、健康的で快活な早期完了青年

(柔軟なF)が最近見られることを指摘し、現代青年の特徴として記述している。自己の内面に關心を示さず、他者関係に関しても比較的浅く自己に関わらないといった特徴は、「分岐としての危機を経ないまま、自分の行動や職業にコミットする」という早期完了地位の定義にあてはまるように考えられる。

しかし岡田(1993)ではこのような柔軟な早期完了青年は確認されなかった。これは「柔軟なF」の青年像が青年期平穩説において述べられる平穩青年と同一のものと考えられているために、早期完了地位でありながら同一性を確立しているという論理的矛盾をきたしている点にあると考えられる。すなわち、病理としての危機をもたず(分岐としての危機はおそらく経験している)平穩青年は、同一性地位判定において「達成」に分類されるべき青年であり、「柔軟なF」の特徴として記述される「健康的で快活」といった面を持つ青年も、実際には同一性達成地位に分類される青年であるとも考えられる。

しかし岡田(1993)では、教育学部のみの分布による地位分類であった点、女子青年のみを調査対象としていた点が問題点として残された。また教育学部において、早期完了の特徴を持つ青年が、両親の実際の職業を継承する形で教職を選択しているのかどうかという点についても考察されていない。

3. 自己意識特性との関連

Fenigstein, Scheier & Buss, (1975) は自己に意識が向きやすい性格傾向として自己意識特性という概念を述べている。これは主に他者の目に映る自分の姿に注意が向きやすい「公的自己意識 (public self consciousness)」と自分自身の内面に注意が向きやすい「私的自己意識 (private self consciousness)」に分けられる。

自我同一性論における「危機」は自分自身への摸索過程であるところから、自分自身に目を向け内省的であることが前提となる。すなわち、危機を経験している者ほど自己意識特性が高いことが考えられる。

4. 教育学部の特徴

教育学部は教員養成という職業に直結した目的学部として設置されている。すなわち(実際の学生の動向とは別に)学生が将来教員になることを前提とした教育システムであり、制度的側面のみならず、大学学部の持つ指向性あるいは望ましいとされる規範も、こうした前提に沿って形成される面が少な

らずあると考えられる。教員として求められる性格傾向として児玉(1994)は「きまじめ 几帳面 誠実 熱心 責任感旺盛 律義 献身的」などを挙げている。こうした性格特徴は早期完了青年に見られる性格の硬さ(岡田1993)と共通するものであり、言い換えれば、早期完了的傾向とは教員として望まれ、受け入れられやすい性格傾向であると言えることができる。

また青年期は様々な役割実験の中で、様々な自己のあり方に同一化し、これらを取捨選択・統合することで自我同一性を達成していくと考えられている。特に職業選択は社会の中での自己の位置付けとして個人に大きな意味を持つものと考えられる。よって職業選択の幅が広い他学部 비해、教育学部の学生は早期完了地位の特徴がより顕著に見られる可能性がある。すなわち、役割実験を経過せず、子供時代以来の単一のあり方、価値観を維持する青年が、他学部 비해教育学部においては見られやすいものと考えられる。(たしかに教育学部全体としては、教員を志望しない学生の数が増大しているが、早期完了的な学生にとって親和的な学部環境であることには変わりないものと考えられる)

以上をふまえて本研究では岡田(1993)で残された問題を検証することも含め、以下の点について検討を行う。すなわち

教育学部の学生は、教育学部以外の学生に比べ早期完了的傾向が高いだろう。

同一性地位分類において、他学部 비해早期完了地位の学生の割合が多いだろう。

また教育学部においては、早期完了地位の者において、教員希望の割合が高く、また早期完了傾向と教員志望の間に正の関連が見られるだろう。

私的自己意識の高い者ほど危機を経験しているだろう。

早期完了青年は、両親の価値観を無批判に継承することが特徴とされている。これは両親の職業と同じ職業を選択するという形で表現されるという見方もできる。すなわち教育学部において、早期完了青年は、両親が教員であり、これを無批判に継承しようとしているというものである。しかし両親が価値を置くものを無批判に継承することが、単純に両親の職業と同じ職種を選択することとして見なしうるかどうかには検討の余地がある。本研究では、この点について検討を行うため、両親の職業継承性と、早期完了傾向の間の関連についても考察する。

方 法

質問紙調査を行った。

調査日時 1994年6月 教養科目及び教育学部の心理学関係授業時間において実施

調査対象 本学各学部学生及び養護教諭特別科学生 (内訳は Table 1を参照)

ただし職種と直結した目的学部である医学部及び歯学部のデータは、教育学部との比較対象として他の学部と併合することは問題があり、またケース数が小さいことから、解析の対象から除外した。

Table 1 調査対象者の内訳

	男(%)	女(%)	合計(%)
0. 教育	16(19.0)	68(81.0)	84(100.0)
1. 理学	19(59.4)	13(40.6)	32(100.0)
2. 工学	44(83.0)	9(17.0)	53(100.0)
3. 法学	16(35.6)	29(64.4)	45(100.0)
4. 経済	10(71.4)	4(28.6)	14(100.0)
5. 人文	23(37.1)	39(62.9)	62(100.0)
6. 農学	6(46.2)	7(53.8)	13(100.0)
7. 医学	2(66.7)	1(33.3)	3(100.0)
8. 歯学	4(57.1)	3(42.9)	7(100.0)
9. 別科	0(0.0)	31(100.0)	31(100.0)
合 計	140(40.7)	204(59.3)	344(100.0)

調査内容

両親の職業 会社員, 公務員, 教員, 自営業, 農業, 無職, その他より, 父親, 母親の職業について尋ねた。

本人の希望職種 会社員, 公務員, 教員, 自営業, 農業, 未定, その他 より本人が希望する職種を選択させた。

尺度項目

①自我同一性地位尺度 加藤の自我同一性地位尺度項目をもとに岡田(1993)において再度因子分析を行ったもの。「傾倒」及び「危機」の下位尺度から成る。

②早期完了特徴項目 岡田(1993)において作成された早期完了青年の特徴に関する項目。「硬さ・一

貫性」及び「両親従順性」の下位尺度から成り、ほぼ Marcia (1966)の記述した早期完了青年の特徴に沿っている。

③自己意識尺度 菅原(1984)の邦訳した自己意識尺度。自己の内面に対する関心を測定する私的自己意識と他者から映る自分自身に目を向ける性格傾向(公的自己意識)からなる。(Table 2)

Table 2 調査項目

自己意識尺度

【公的自己意識】

自分が他人にどうおもわれているのか気になる

*世間体など気にならない

人に会う時、どんなふうにもふるまえば良いのか気になる

自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる

人に見られていると、ついかっこうをつけてしまう

自分の容姿を気にするほうだ

自分についてのうわさに関心がある

人前で何かする時、自分のしぐさや姿が気になる

他人からの評価を考えながら行動する

初対面の人に、自分の印象を悪くしないように気づかう

人の目に映る自分の姿に心を配る

【私的自己意識】

自分がどんな人間なのか自覚しようとしている

その時々気持の動きを自分自身でつかんでいたい

*自分自身の内面のことには、あまり関心がない

自分が本当は何をしたのか考えながら行動する

ふと一歩離れた所から自分をながめてみることもある

自分を反省してることが多い

他人を見るように自分をながめてみることもある

しばしば、自分の心を理解しようとする

つねに、自分自身を見つめる目を忘れないようにしている

気分が変わると自分自身でそれを敏感に感じ取るほうだ

早期完了特徴項目

【硬さ・一貫性】

これから先も自分の信念は大きく変わりはしないだろう

学部や専攻を決める時、真剣に考えて決めた

自分の信念は昔から一貫しており、大きく変わらない

今所属している学部や専攻は迷わず決めた

【両親従順性】

両親の価値観に疑問を持ったことはない

親が望まないような生き方はしたくない

自分は周りの大人や親の言う通りに生きてきた

自分の価値観は両親と一致している

自我同一性地位尺度

【傾倒】

私は「こんなことがしたい」という確かなイメージを持っていない

*私には特にうちこむものはない

*私は、自分がどんな人間で何を望みおこなおうとしているのかを知っている

*私は今、自分の目標をなしとげるために努力している

私には、自分がこの人生で何か意味あることができるとは思えない

【危機】

私は、一生けんめいにうちこめるものを積極的に探し求めている

私は、自分がどんな人間なのか、何をしたいのかということ、かつて真剣に迷い考えたことがある

私は、自分がどういふ人間であり、何をしようとしているのかを今いくつかの可能な選択を比べながら真剣に考えている

私は以前、自分のそれまでの生き方に自信が持てなくなったことがある

註：*印は逆転項目

結 果

自我同一性地位尺度（以下「地位尺度」と称す）及び早期完了特徴尺度（以下早期完了尺度と称する）については岡田（1993）に基づいて各因子ごとに合成得点を算出した。すなわち地位尺度については「危機」「傾倒」、早期完了尺度については「硬さ・一貫性」「両親従順性」のそれぞれの下位尺度から成る。但し、地位尺度のうち岡田（1993）では「私はこれまで、自分について自主的に重大な決断をしたことはない」が傾倒因子として挙げられていたが、他の項目に比べ因子負荷量が小さいこと、項目内容が同一因子での他の項目と合致しないなどの理由で、本研究では除外された。自己意識尺度についても下位尺度ごとに合成得点を求めそれぞれ「公的自己意識得点」「私的自己意識得点」とした。

Table 3に教育学部、教育学部以外それぞれでの平均値と標準偏差を示す。教育学部と他学部での平均値の差を検定したところ、自己意識尺度では私的自己意識、地位尺度及び早期完了尺度の各下位尺度において、教育学部生が他学部生よりも有意に高かった。

Table 3 教育学部と非教育学部での各変数の平均値と標準偏差

		公 的 自己意識	私 的 自己意識	傾 倒	危 機	硬 さ ・ 一 貫 性	両 親 従 順 性
全体	[平均値]	46.19	42.36	18.91	15.89	14.37	12.00
	[標準偏差]	7.63	7.50	4.84	3.88	3.76	3.54
	[n]	331	340	344	331	332	333
E：教育	[平均値]	47.06	43.68	19.93	16.50	14.98	12.94
	[標準偏差]	6.94	6.65	5.04	3.33	3.79	3.54
	[n]	115	115	115	114	114	115
NE：教育学部 以外	[平均値]	45.72	41.66	18.38	15.56	14.06	11.50
	[標準偏差]	7.94	7.84	4.66	4.11	3.71	3.44
	[n]	216	215	219	217	218	218
	t(E対NE)	1.52	2.47a*	2.81**	2.28a*	2.15*	3.59**
			E>NE	E>NE	E>NE	E>NE	E>NE

註 a: Welchの修正によるt値 E: 教育学部 NE: 非教育学部
*: p<.05 **: <.01

各変数間での単純相関をピアソンの相関係数によって求めた (Table 4)。その結果危機と私的自己意識、硬さ・一貫性と傾倒の間に、高い相関関係が見られた。

同一性地位を判定するため、危機及び傾倒の得点について調査対象者全体の得点分布の上下30%についての調査対象者を分類した。すなわち危機・傾倒共に高い者を「同一性達成群」、危機が高く傾倒が低い者を「モラトリアム群」、危機が低く傾倒が高い者を「早期完了群」、危機・傾倒共に低い者を「同一性

拡散群」とした。教育学部・教育学部以外での各地位の度数を Table 5に示す。(ここに見られるように、教育学部では達成が多く拡散が少ない傾向が見られる)。

自我同一性各地位での早期完了尺度の平均値と標準偏差を Table 6に示す。地位間での一元配置分散分析を教育学部、教育学部以外それぞれで行ったところ、いずれも「硬さ・一貫性」の下位尺度において、モラトリアム、拡散よりも早期完了、達成地位で有意に高い平均値を示していた。

Table 4 変数間のピアソンの単相関係数

全 体	私 的 自己意識	傾 倒	危 機	硬 さ・ 一 貫 性	両 親 従 順 性
公的自己意識	.172	.153	.048	-.068	.218
私的自己意識		-.277	.576	.117	-.014
傾倒			.318	.424	-.017
危機				.063	-.056
硬さ・一貫性					.231

教育学部	私 的 自己意識	傾 倒	危 機	硬 さ・ 一 貫 性	両 親 従 順 性
公的自己意識	.086	.094	.052	-.021	.187
私的自己意識		-.273	.677	.114	-.174
傾倒			.288	.457	.091
危機				.086	-.207
硬さ・一貫性					.203

教育学部以外	私 的 自己意識	傾 倒	危 機	硬 さ・ 一 貫 性	両 親 従 順 性
公的自己意識	.193	-.208	.036	-.105	.217
私的自己意識		.260	.532	.101	.022
傾倒			.318	.390	.032
危機				.036	-.027
硬さ・一貫性					.220

Table 5 自我同一性各地位の度数 (下段は%)

地 位	拡 散	モラト リアム	早 期 完 了	達 成	計
教育学部	9	11	34	65	119
	16.9	13.8	16.9	52.3	100
教育学部 以 外	45	26	18	35	124
	36.3	21.0	14.5	28.2	100
計	56	35	29	69	189

教育学部、教育学部以外、それぞれの地位における早期完了尺度の平均値をプロットしたものをFig. 1に示す。ここに見られるように傾倒の高低によって分けられる2群(“達成・早期完了”群と“モラトリアム・拡散”群)は「硬さ・一貫性」軸において、その学部全体での平均より上下に分かれており、この軸が傾倒の高さを反映していることが分かる。また教育学部全体での硬さ・一貫性の平均値は、

教育学部以外での早期完了地位での平均にはほぼ等しいことが分かる。

自我同一性地位および学部ごとの希望職種をTable 7に示す。

両親のうちのいずれかの職種と本人の希望職種が一致した者と一致しない者の間で、各変数の平均値を比較したところ、いずれの変数においても有意な差は見られなかった (Table 8)。

早期完了的特徴と教員を希望職種とするか否かの関連を見るために、早期完了尺度得点と希望職種(教員希望・非希望)の間の点2系列相関係数を求めたところ、硬さ・一貫性においては、教育学部で $rpb=.27$ (無相関検定で $t=2.97$ $p<.01$)と関連が見られたが、教育学部以外では、 $rpb=.01$ ($t=.13$)で関連性は見られなかった。両親従順性については教育学部で $rpb=.15$ ($t=1.58, p=.12$)、教育学部以外で $rpb=-.01$ ($t=.15, p=.92$)でもとに有意な関連性とはいえないが、教育学部が教育学部以外に比べわずかな関連を見ることもできる。

Table 6 学部別での自我同一性各地位での早期完了特徴項目の平均値と標準偏差 (下段)

地 位	拡 散	モラト リアム	早 期 完 了	達 成	計	地位間 F
[教育学部]						
硬さ・一貫性 (標準偏差)	13.00 4.17	10.33 2.35	16.46 4.08	16.47 3.56	15.03 4.22	8.55** M=D<F=A, D=A
n	11	9	11	34	65	
両親従順性 (標準偏差)	14.00 3.03	12.67 4.12	12.46 3.64	12.00 3.76	12.51 3.67	.82
n	11	9	11	34	65	
[教育学部以外]						
硬さ・一貫性 (標準偏差)	12.43 3.89	12.46 2.57	15.33 3.88	14.77 4.17	13.53 3.89	4.70** D=M<A=F, D=A
n	44	26	18	35	123	
両親従順性 (標準偏差)	11.16 3.66	10.81 2.95	11.06 3.57	11.34 4.14	11.12 3.62	.11
n	45	26	18	35	124	

** ; $P<.01$ D: 拡散, M: モラトリアム, F: 早期完了, A: 達成

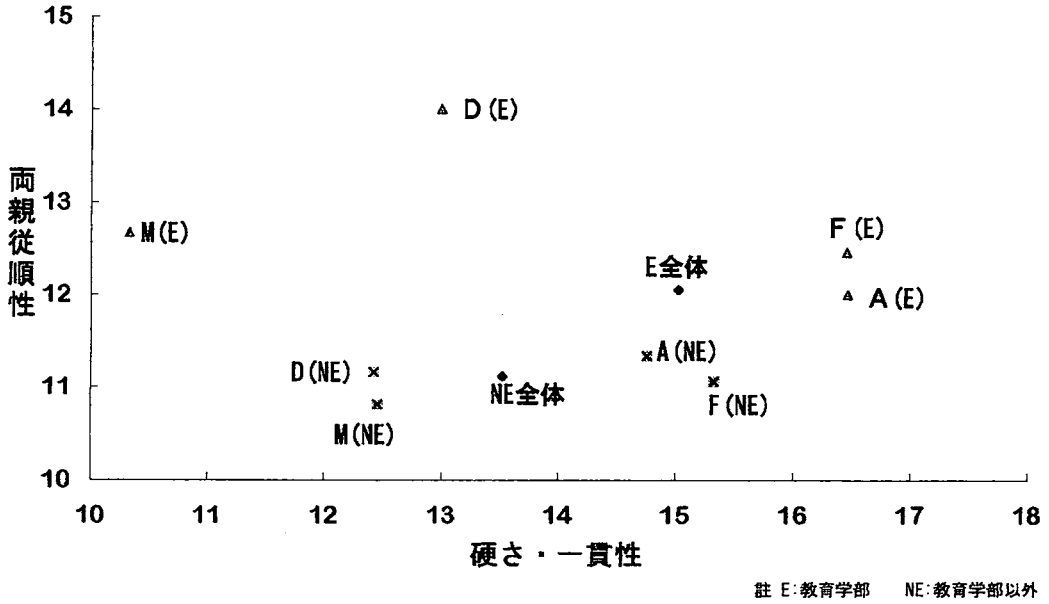


Fig. 1 早期完了尺度の学部・各地位ごとの平均値のプロット

Table 7 同一性地位別希望職種 希望職種 (度数%)

教育学部				
	拡散	モラトリアム	早期完了	達成
0 その他	1 (9.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (3.1)
1 会社員	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (9.1)	0 (0.0)
2 公務員	5 (45.5)	0 (0.0)	1 (9.1)	2 (6.3)
3 教員	5 (45.5)	5 (55.6)	8 (72.7)	26 (81.3)
4 自営	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
5 農業	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
6 未定	0 (0.0)	4 (44.4)	1 (9.1)	3 (9.4)
計	11	9	11	32
教育学部以外				
	拡散	モラトリアム	早期完了	達成
0 その他	1 (2.2)	0 (0.0)	4 (22.2)	8 (22.9)
1 会社員	7 (15.6)	3 (11.5)	6 (33.3)	5 (14.3)
2 公務員	10 (22.2)	11 (42.3)	3 (16.7)	9 (25.7)
3 教員	2 (4.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (11.4)
4 自営	2 (4.4)	2 (7.7)	0 (0.0)	3 (8.6)
5 農業	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
6 未定	23 (51.1)	10 (38.5)	5 (27.8)	6 (17.1)
計	45	26	18	35

Table 8 両親との職業一致・不一致群間での各変数の平均値の比較

全 体		公 自 己	私 自 己	傾 倒	危 機	硬 さ 一貫性	両 親 従順性
一 致	45.46	42.42	18.86	15.86	14.32	11.51	
(標準偏差)	7.54	7.24	5.01	3.55	3.70	3.41	
n	92	92	93	92	93	93	
不 一 致	46.51	42.26	18.90	15.83	14.36	12.21	
(標準偏差)	7.69	7.59	4.79	3.99	3.79	3.57	
n	235	234	237	235	235	236	
t	1.12	.18	.06	1.26	.08	1.63	

教 育 部		公 自 己	私 自 己	傾 倒	危 機	硬 さ 一貫性	両 親 従順性
一 致	45.63	43.42	20.42	16.37	14.05	11.74	
(標準偏差)	7.53	6.27	4.81	3.27	3.73	3.07	
n	19	19	19	19	19	19	
不 一 致	47.43	43.56	19.74	16.41	15.13	13.23	
(標準偏差)	6.85	6.66	5.12	3.31	3.78	3.57	
n	93	93	93	92	92	93	
t	1.03	.08	.53	.05	1.13	1.69	

教 育 外		公 自 己	私 自 己	傾 倒	危 機	硬 さ 一貫性	両 親 従順性
一 致	45.41	42.16	18.46	15.73	14.39	11.45	
(標準偏差)	7.59	7.49	5.01	3.63	3.72	3.51	
n	73	73	74	73	74	74	
不 一 致	45.90	41.40	18.35	15.46	13.86	11.55	
(標準偏差)	8.16	8.06	4.50	4.34	3.72	3.42	
n	142	141	144	143	143	143	
t	.43	.68	.17	.46	1.00	.20	

考 察

1. 自我同一性地位の特徴

地位尺度における「危機」下位尺度得点は私的自己意識と高い関連がみられた。自己の内面に目を向ける傾向が高いほど危機を経験しているといえ、当初の仮説は支持された。

地位尺度の「傾倒」下位尺度と早期完了尺度の「硬さ・一貫性」下位尺度の間でも高い相関が見られた。また地位間での比較においても、傾倒の高い「達成」

と「早期完了」地位が他の地位よりも「硬さ・一貫性」得点で有意に高い値を示している。これらのことから、早期完了の特徴としてみられる信念の硬さは、地位判定における傾倒の高さの反映と考えられる。

しかし早期完了尺度の「両親従順性」下位尺度については地位尺度とは相関が見られず、各地位間で得点差も見られなかった。早期完了青年の特徴として記述されてきた両親の価値観の継承性が、傾倒・危機という操作的定義からの地位判定によっては見いだされなかった。このことは以下のように考えら

れる。第一に地位尺度、早期完了尺度の両尺度の内容的妥当性を再検討する必要がある。大野（印刷中）は、自己の生き方についての主体的選択についての意志決定期間の有無を操作的に危機の有無と定義してしまい、これを自我同一性達成の必要条件とすること自体に疑問を呈している。すなわち、自分の生き方について主体的選択をし、その選択に対して責任をもち、かつ自我親的であるならば、自覚的に悩む経験が無くても、達成地位と分類されるべきであるとしている。逆に言えば、地位尺度における「危機」の高低による分類（達成か早期完了か、モラトリウムか拡散か）自体の内容的妥当性が問い直される必要があると言えよう。

また、早期完了尺度が実際に早期完了の特徴と対応しているかどうかについても、事例との対応などによる検討が今後必要になると考えられる。早期完了青年には、児童期までの両親、社会への同一化をそのまま維持している未熟な早期完了（いわゆる「良い子」）と、これらの同一化をより強化し自己を定義づけてしまった早期完了があるように思われる（「完了」という語からは後者がより適切であろう）。北村（1983）が述べる「柔らかいF」は前者に、「硬いF」は後者に該当することも考えられる。しかし「未熟な早期完了」青年は、あくまで世間の規範への同一化をそのまま維持しているために、外界との衝突・葛藤が生じず、一見適応的であるが、自己の独自の規範としての同一性を平穩のうちに確立した青年とは異なると考えられる。本研究における早期完了尺度が、これらの2つの早期完了青年像を区別しうるものかどうかは、今後の検討課題である。

2. 学部間比較

早期完了尺度得点においては教育学部の方が高く、早期完了の特徴が他学部よりも全体として高いことが示唆された。学生時代に様々な職業の可能性を模索せず教員になった者は、教員という単一の理想像しかもたず、様々な試行錯誤を通じた社会的体験に乏しくなりがちであり、教員に就いた後不適応を生じやすい点も指摘されている（伊勢呂・児玉・石光・武藤，1994）。「教育学部において教職を熱心に希望し迷わない」という姿勢は、学部の目的に沿った望ましいもののように一見思われるが、試行錯誤、迷い、不熱心さなども、個人の発達や適応という観点からは、必ずしも無意味とはいいきれないといえよう（勿論「教育学部で教員を熱心に希望するのが適応的でない」というのではない）。

一方地位尺度においては、危機、傾倒とも教育学部が他学部よりも高い平均点を示しており、より達成地位に近い特徴を持つといえることになる。また同一性地位分類においては当初の仮説とは異なり、早期完了地位の者は他学部より顕著に多い傾向は見られなかった。このように本研究では地位尺度における結果と早期完了尺度における結果が異なっている。これは前述のように早期完了尺度における早期完了傾向の高さが、地位尺度での達成地位と早期完了地位を区別しないことによるものである。

3. 希望職種、職業継承性との関連

教員志望・不志望と早期完了傾向の間には、教育学部においてゆるやかな関連が見られた。教育学部における教員志望者の中に、自己の適性を十分再考・吟味することない早期完了傾向の高い者が含まれる傾向が他学部に比べやや見られると言えよう。当然のことながら、教員を志望する者すべてが早期完了傾向が高いことは、理論上あり得ない。また個人の自我同一性の様相は職業選択領域以外の多くの領域によって決定されるため、緩やかな相関関係にとどまったものと考えられる。

両親の職種と本人の希望職種的一致・不一致と各変数の間には関連性は見られなかった。これは、早期完了青年の特徴として記述される「両親の価値観への無批判な継承」とは、単純に両親と同じ職業を選択することによって示されるものではないことによるものと考えられる。大野（印刷中）は早期完了の特徴を示す女子学生の陳述の例として「親の『女の子にとって教師という職業がいちばん』という価値観を鵜呑みにし、全く疑わない、という例をあげている。親が教員であるなしにかかわらず、「教員がふさわしい」とする親の価値観を自分自身の問題として捉え直す過程を経ずにそのまま受け入れる場合、同一性の様相としては早期完了的と考えられる。また両親や世間の価値観を再吟味することなく、いわば建て前道徳的な規範を無批判に受け入れる傾向は、職業選択には必ずしも直接反映されるとは限らない。本研究の結果は、教育学部学生が他学部よりも、こうした規範の持ち方をしやすい傾向を示唆するものである。学部の雰囲気としてこうした規範の持ち方を支持する面があり、青年が互いに早期完了傾向を強化しあう可能性が考えられる。一般に青年期には、両親への同一視から離れ、新たな規範のモデルとなる同年代友人集団が求められるが、世間の規範に従順であることを期待・支持する集団に同一

化した青年は、結果的に早期完了的な特徴を示すことになるだろう。また「建て前道徳」というものが、常に順社会的な内容を持つものであるため、ここから分離した独自の規範を（周囲の支持を失わない形で）見いだすことが困難であることも挙げられる。

これらの点については今後実証的データに基づく検討が更に必要になると考えられる。

引用文献

- Erikson, E.H. 1959 *Identity and the life cycle*. (エリクソン, E.H 「自我同一性」 小此木啓吾訳編 誠信書房 1973)
- Fenigstein, A., Scheier, M.F., & Buss, A.H. 1975 Public and private self-consciousness: assessment and theory. *Journal of consulting and clinical psychology*, **43**, 522-527.
- 伊勢呂祐史・児玉隆治・石光聖秀・武藤清栄 1994 座談会 教師のメンタルヘルス 現代のエスプリ **323**, 至文堂 Pp.5-38
- 加藤 厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, **31**, 292-302.
- 北村英哉 1983 現代日本における自我同一性形成の特質—早期完了群の再検討を手がかりにして— 東京大学教育学部心理教育相談室紀要 **4**, 143-151.
- 児玉隆二 1994 教師になる人たちのメンタルヘルス 現代のエスプリ **323**, 至文堂 Pp.85-93
- Marcia, J.E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of personality and social psychology*, **3**, 551-558.
- 村瀬孝雄 1984 青年期危機説への反証 精神科MOOK **6**, 30-36. 金原書店 東京
- 村瀬孝雄・村瀬嘉代子 1973 事例研究による平均的青年の人格発達過程 精神衛生研究, **22**, 11-25
- 岡田 努 1993 自我同一性早期完了的地位についての一考察 新潟大学教育学部紀要, **35**, 57-68.
- 大野 久 印刷中 「青年期の自己意識と生き方」 講座 生涯発達心理学 第4巻 青年期 自己への問い直し 第4章 金子書店 所収
- 清水将之・藤頼和寛 1976 青春期危機について(その1)文献の展望と予備的考察 精神医学 **8**, 2, 145-152.
- 菅原健介 1984 自己意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, **55**, 184-188